

広告

◎ 石狩随想

◎ 石狩随想

127

厚田道の駅へ
 その丘の一本道を、あい風を受けながら走ると突然坂の向こうに海岸段丘に囲まれた湾処わんじょが見える。ほどなく映る小集落と織りなす景は、今月始まる観光地としての第二風景である。望来まき(至ウライ・浅い流れ)と名付けられ、望来獅子舞(富山県伝承)、ソメイヨシノの北限、桜の名所・戸田墓園のある所。その先数キロ小さな漁業集落があり、古いにしへの北前船停泊地であった。東側の丘に小さなお宮さんが置かれている。厚田発祥地でもあり、追鯨の漁場であった。もつと走り続けると、旧厚田村本村にたどり着く。アイヌの着衣アツトウシアツトウシの原料となる「おひょうおひょう(楡)」の木が密生している故の地名とのこと。まちの誇りは鯨お大尽・佐藤松太郎、創価学会第二代会長・戸田城聖、小説家・子母澤寛、横綱吉葉山を輩出したことである。「新選組始末記」や「座頭市物語」「厚田日記」などの小説はこの集落に関わりを持つている。「縁のむら」でもある。地域は「近説遠来」をまちおこしのキーワードとし、その姿を、まもなく丘の上に開業する「道の駅」に託した。厚田衆はここ一番頑張る精神風土の土地柄だ。沖には夕焼けと半島の影が石狩湾を美しく奏でている。自転車サイクルラックに掛けて、さあ中に入ってみよう。(市長)